

まちDIALOG

ダイアログ



宮城 ヨシ子 みやぎ よしこ

1939年伊是名村生まれ。2007年かりゆし長寿大学入学(写真を選択)。2008年同大学卒業。2012年Copl光画文化研究所写真講座入所。勇崎哲史氏に師事し、写真に目覚める。2017年、初の写真展を開催し、併せて写真集を出版。カメラを常に肌身離さず首から提げて歩いていると、被写体から呼びかけられ、迷わずシャッター切る。思いがけない映像に驚きがある。構えて撮るのは少ないよ。ルンルンで楽しいさ〜。那覇は沖縄県の大きな地域だと思う。各地に広がる地域とコラボしながら独自の那覇を築き上げてほしい

大城 翼 おおしろ つばき

2000年東京生まれ。3歳から沖縄に移住。2022年3月、沖縄工業高等専門学校卒業。18歳から本格的に写真を撮る。これまでに5回個展を開催。進学で幼少期を過ごした那覇を離れたことで改めて那覇の魅力に気づく。植物の侵食や、建物の朽ち具合とそれに新築にマンションを交差させるなど、まちや人を介して、時間のうつろいや個性が調和している様子を表現した。今後は写真を用いた感情表現を追求したい。写真の情報量を少なくし、抽象的な写真で感情を伝えられれば

- クロストークゲスト/金城 博之 平良 亜弥 真喜志 奈美 又吉 美輪
- 参加アーティスト/犬塚 拓一郎 上原 耕生 大城 翼 翁長 巴西 加納 由美 古謝 麻那子 児玉 美咲 津波 博美
テイトゥス・スプリー harikuyamaku 宮城 ヨシ子
- スタッフ/AIO/テイトゥス・スプリー 内間 直子 【なは一と】林立 平岡 あみ 金城 佳歩 仲嶺 絵里奈
【CAMP-O協同組合】久高 友嗣 宮平 未来
【司会・映像制作】平良 竜次 【映像制作】田口 直也 【撮影】大城 翼 【音響】丸山 誠
【運営アシスタント】島袋 景子 【現場アシスタント】知念 尚子 奥間 一樹
【校正】藤吉 優子 【編集・デザイン】studio BAHCO
- 協力/なは市民活動支援センター 那覇市歴史博物館 くもじ地域自治会 那覇市牧志駅前ほしぞら公民館 Punga Ponga RENEMIA

主催/那覇市 企画制作/AIO×那覇文化芸術劇場 なは一と

編集後記

今回のプロジェクトを通して出会った人の中には、なは一とで初めて本格的な舞台を観たという方も多く、これを機にたくさんの人達が劇場に足を運び、いろいろなものを観て聴いて、目や耳を肥やし、観客もなは一とAIOともに育っていくことを楽しみにしています。県民にとっての創造拠点として、さらに開かれた場としてその存在が大きくなることを期待しています (AIO 内間 直子)



一人ひとりの創造性を、アートで社会に働きかける

About us
AIOとなは一と、
クロスオーバープロジェクトが目指すもの

Artist research
アーティストの視点で見た那覇のまち

Voice
クロスオーバープロジェクトに
参加して感じたこと

Event report
開かれた場で
アートを楽しむ休日

AIO ART INITIATIVE OKINAWA

那覇文化芸術劇場なは一と
NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHART



AIO × なは一とクロスオーバープロジェクトを企画・運営するAIOの代表ティトウス・スプリーと事務局長の内間直子、なは一との林立騎が、それぞれの立場から見たアートシーンや、現状と課題、AIOの成り立ち、劇場とは何か?を考える。

AIO × なは一とクロスオーバープロジェクト

AIOと那覇文化芸術劇場なは一とが、劇場という枠や演劇、音楽、美術など芸術のジャンルを超えて、「アートを通して対話する」ことをテーマにしたアートプロジェクト。なは一とのミッションでもある「専門スタッフと市民の対話」に基づいて、教育や国際交流、福祉の視点から「つくる」「みる」「体験する」「育む」を実践した。キックオフとして、なは一と小劇場でクロストークを開催。その後、場をまちに移して二度のクロスオーバー(アートと地域をつなげるイベント)を行った

ヨーゼフ・ボイスの作品「7000本のオーク」
Photo by Baummapper

アートに地域の空気感

ティトウス・スプリー AIO代表

21年前に沖縄に移住してすぐの頃、路地の探検で那覇の魅力にハマってしまい、週に2、3回はまちに出て、写真を撮り、出会った人とおしゃべりをした。独特な空気の中、育まれている沖縄のコミュニティは、人に優しい場面が多く、表現が自由で個性的な人が多いと感じた。密集している那覇のまちには日常的な創造性にあふれていて、まちをぶらぶらしているだけで、住人の個性を表す作品のようなまち角や生活空間に遭遇する。お互いの顔が見える開かれた市場では、沖縄の女性がエネルギーだ。戦争の体験や小さな島での暮らしには厳しい面もあり、助け合う力やその場にあるもので工夫する創造性が培われてきたように思う。

このように那覇の魅力に取りつかれた私は、そのしなやかな原動力のわけを探るべく、2002年から4回ほど、那覇の中心部で「wanakio」(※1)というアートプロジェクトを開催した。wanakioは、私のドイツでの経験が背景となって生まれた企画だ。2000年代の後半に日本各地でブームのように開催されたアートフェスティバルは、当時はまだそれほど存在していなかったように思う。



wanakio (ワナキオ) (※1)

「okinawa」を並び替えた造語。視点を変えると、まったく違った見え方をするという意味を持ち、県内外や海外のアーティストが、まちに滞在して制作、展覧会を行うアートイベント。2002、2003、2005、2008年に開催。まち歩きや、子ども達が地域の魅力を発見できるようなワークショップ、地域とアートについてのシンポジウムなども開催した。また「まち・社会・アート」をテーマにした、トランスアカデミーという教育プログラムも行われた

ヨーゼフ・ボイス(※2)

ドイツの現代美術家・彫刻家・教育者・音楽家・社会活動家。「社会彫刻」という概念を編み出し、彫刻や芸術の概念を「教育」や「社会変革」にまで拡張した。その思想と、「人間は誰でも芸術家であり、自分自身の自由さから、「未来の社会秩序」という「総合芸術作品」内における他者とのさまざまな位置を規定するのを学ぶのである」という言葉は、20世紀後半以降の芸術に非常に重要な影響を残している

私が「まちの中で美術作品と出合う」経験をしたのは、1955年から4年または5年ごとに開催される「ドクメンタ」という国際的な現代美術展で、ドイツ人のアーティスト、ヨーゼフ・ボイス(※2)が1982年に発表した作品がきっかけだった。「7000本のオーク」というその作品は、7000本のオークと7000個の玄武岩(石柱)と一緒に植えるという試みで、まちの広場からスタートし、通りに沿って5

年かけて完成させた。この作品は、年月を経てしかかたちの見えてこない彫刻であり、まち中の都市林となることで、作品自体が環境になる環境芸術を世に問うたのだ。当初7000本のオークはドイツ中のメディアによって賛成と反対意見に分かれて熱く討論された。ボイスは以前から「社会彫刻」(※3)という表現を使い、当時16歳だった私にはまったく理解できなかったが、7000本のオークを通して、初めて公共の場で行う社会に働きかけるアートという概念を植え付けられた。1960年代になると、当時の優れた現代美術家達も非常に主観的な表現を社会に投げかけて、アートの風がドイツの国内に吹くようになった。様々な素晴らしい美術作品の力は、戦後の反省から逃れ、経済開発に夢になっていたドイツに人間らしさを取り戻してくれたと思う。個性的な一人ひとりの自由な表現が民主主義の基礎であり、今振り返ってみると、ひとつ前の世代の現代美術家達、私達の自由の翼を大きく広げてくれた。

まったく異なる社会環境であるが、ドイツの現代美術の話と那覇のまちをつなげるのは、一人ひとりの創造性を社会に働かせるという意味では同じだ。那覇のまちを歩く「人は誰もが芸術家である」というボイスの言葉を思い出す。残念ながら開発によって、見えていた一人ひとりの個性が失われている気がする。まち中の個性が次々と大型へとシフトし、一人ひとりが関わるべきまちが、消費されるまちになってきている印象が否めない。

美術(アート)は個人の創造性を大事にする分野だ。それぞれの自由な発想から生み出されるアートは、社会の「発酵」みたいなもの。アーティストと社会がつながった時にどのような表現が生まれるか。AIOは、アーティストに対話(例えば、乳酸菌や麹菌や酵母などのようなもの)と開かれた場(発酵しやすい環境)を提供して、そこから生まれる何かを楽しみにしている。

ティトウス・スプリー

琉球大学教育学部美術教育准教授・建築家・アーティスト・キュレーター・教育者。ミラノのドムスアカデミーのデザイン科卒業後、ベルリン芸術大学において建築の修士課程を修了。1996年から東京大学に留学し、2001年まで東京・向島エリアの研究とまち再生活動を行う。2001年から琉球大学に在職し、沖縄を拠点に、建築・デザイン・アート・教育を結び付ける国際的な活動を展開している。旧前島アートセンター副理事。2002、2003、2005、2008年に開催された国際芸術展「wanakio」共同代表

社会彫刻(※3)

ヨーゼフ・ボイスの提唱した概念で「あらゆる人間は、未来に向けて社会を彫刻しようし、しなければならない。芸術こそ進化にとっての唯一の可能性、世界の可能性を変える唯一の可能性」という信念。芸術は、芸術史から出てきたような彫刻や絵画ではなく、「拡張された芸術概念」であり、「目に見えない本質を、具体的な姿へと育て」、「ものの方、知覚の形式をさらに新しく発展・展開させていく」こと

AIOの立ち上げと主体性のある組織づくり

芸術や美術とは無縁だった内間直子は、1997~2011年に暮らしたロンドンで、芸術文化を取り巻く社会環境や人々のアートに対する考え方の違いに衝撃を受けた。

彼女が沖縄を離れていた2000年代頃から前島アートセンター(以下MAC※4)が県外や海外のアート関係者と県内をつなぐ役割を担い、国際芸術展wanakio開催によって、まち中のアートプロジェクトを通じた積極的な国際交流が行われていた。彼女はヨーロッパでwanakioに参加したアーティストの津波博美氏やフロリアン・パロ氏と出会い、彼らの作品を通して、自分の知らない当時の沖縄が強く印象に残った。フロリアンによるドキュメンタリー映画「wanakio 2005」では、農連市場周辺の人々と滞在制作していた外国人アーティストの様子が生生きと映し出され、アーティストの主体性や市民との関わり方が県内の後発のアートフェスティバルやアートプロジェクトとは違うと感じた。

前島アートセンター(※4)

2001年前島3丁目の旧高砂砲ビルにて開催された「前島3丁目ストリートミュージアム」をきっかけに活動を開始。2000年代の沖縄のアートシーンを牽引してきたオルタナティブスペース(美術館でも画廊でもなく、相対的に自立したアートスペース)。「wanakio」や会報誌「Third Street」の発行、展覧会、教育普及活動などを多数実施。2007年安里の栄町市場に拠点を移し、2011年10年間の活動の歴史に幕を閉じる

帰国後は、MACの理事の一人だった故・国吉宏昭と親しくなり、展覧会を巡って互いの感想を語り合ううちに、県内の美術関係者が継続して活動するためには、個人の方だけでは限界があると感じる。そして、国内外とのネットワークを広げるためのサポート機関や事務局など、裏方を担う人材育成の大切さ、MACが担っていた機能や役割の必要性を実感する。ヨーロッパと比べて、沖縄には芸術のジャンルを超えた交流や対話することによって感性を刺激し合う交感の場が少ないことも驚いた。交感の場は、世代を超えた交流を促し、芸術を通して沖縄の歴史や時代を振り返り、節目節

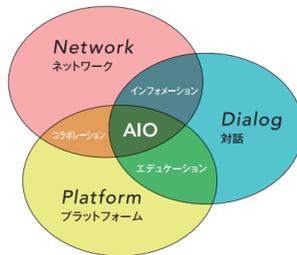
目にスポットライトを当てて、新たなアートのレイヤーを重ねる作業ができる場所だ。

また、MAC理事長を務めた宮城潤氏が、那覇市の「若狭公民館」で地域に根差した社会教育としてのアートを実践していることにも触発された。

ティトウス・スプリーはMACの副理事であり、wanakioの共同代表を務めており、MAC解散後は、個人で国内外と沖縄のアート関係者の窓口となっていた。内間とティトウスはこれまでの経験と考え方、お互いの視点に関心を持ち、今何かを始めることは、必ず未来への種まきになると信じて、ともにAIO(エーアイオー/アート・イニシアチブ・オキナワ)を立ち上げる。

AIOの主な活動は、三つの柱を軸に展開している。ネットワーク(人脈)づくり、ダイアログ(対話)づくり、プラットフォーム(基盤)づくり。それぞれの柱を中心にした活動が「インフォメーション(情報)収集に役立ち、「コラボレーション(共同制作・創作など)」を生み、「エデュケーション(教育など)」というに相乗効果を発揮して、人脈をつくり、活動の幅を広げ、対話を通して知識や経験の共有を図るなど、企画したイベントの運営や実践を通して交流や経験を積んでいる。さらに、沖縄にゆかりのある人達や沖縄のアーティストとつながりを持ちたくて情報を探している人達の窓口にもなっている。

【AIOのコンセプト 三つの柱】



今後は、沖縄の魅力的なロケーションを生かしたアートと経済活動をつなげるプロジェクトなどに取り組む予定だ。しかし、持続的な活動を行うためには、課題も多い。

(取材 = 権 聖美)

AIO(エーアイオー/アート・イニシアチブ・オキナワ)

2020年3月、沖縄の現代美術の発展を支援するために設立した組織。アートを通して地域に根差したプロジェクトを企画・開発・運営することによって、想像力を高め、社会への問題提起、活発な議論を促し、県内外の人々と様々な場所を結び付ける。また、AIOには「Art in Okinawa」、「Art Information Okinawa」などの意味も込めた

うちま なおこ

ESM Okinawa代表、アーツマネージャー。1997年渡英。Westminster Kingsway Collegeにて、写真、Fine Artを専攻。2009年「ロンドン沖縄DAY」、2010年石川真生写真展「沖縄ソウル」を企画。2011年に帰国し、沖縄市一番街周辺のアートプロジェクトや版画家名嘉睦絵の美術館及びギャラリマネージャーを務める。その後、OCVB沖縄フィルムオフィス海外プロモーションを経て、現在は撮影コーディネーターや様々なアートプロジェクトの企画・運営に携わる

劇場とはどのような場所か

林立騎

那覇文化芸術劇場なは一と総括企画制作専門員



劇場の不思議な可能性は、劇場とはどのような場所か、劇場では何ができるか、劇場は誰のための施設なのか、実は誰にもわからないことである。劇場は舞台芸術び・育む機会を生み出す。三つの柱を軸に相乗効果を発揮して、人脈をつくり、活動の幅を広げ、対話を通して知識や経験の共有を図るなど、企画したイベントの運営や実践を通して交流や経験を積んでいる。さらに、沖縄にゆかりのある人達や沖縄のアーティストとつながりを持ちたくて情報を探している人達の窓口にもなっている。

劇場とは何かかわからないからこそ、劇場はアーティストを必要とし、観客を必要とする。アーティストによって劇場の可能性は実験され、拡張され、そこに観客が集まり、反応することで、その場に一時的に集まった見知らぬ者達の仮想的な共同体が生まれる。劇場がどのような場所かは、いつまでも誰にもわからない。劇場で働く者は、誰よりもそのわからなさ、その可能性自体を自覚している。そしてアーティストだけでなく、観客もまた劇場をもつくる。だから劇場は、劇場に何が可能なのかまったく知らない観客を常に新たに必要

とする。何が可能かわからない中で、ここに必要なことをかたちにする営み自体が劇場の本質をなしており、そうした試みのためには常に劇場を知らない方々との新しい協働が不可欠だからである。「演劇の歴史を決定づけるのは、新しい観客の出現である」(レイモンド・ウィリアムズ)という言葉は、その意味において理解される。

劇場は、未知の共同体が異なるかたちで繰り返し生まれることで、都市の中の実験室となる。こうした安全な実験室、多くのことを試すことができる空き地は、これまでの社会を支えてきた諸前提が崩れ、私はいかに生きるか、私達はいかにともに生きるかが問い直されている今、これまで以上に必要とされている。

劇場は、開かれているようでありながら、内心では馴染みのない利用法を怖がり、見知らぬアーティストに不安を抱き、まだ見ぬ観客を怖れている。それゆえにややもすると、同質的で安心できる「私達」をつくらうとする。そうではなく、劇場、アーティスト、観客が互いに他者として出会いは、場合によっては市場や学校や、議会にすることも可能で、集会所や避難所、宿泊施設やワクテンセンターにもなりうるだろう。劇場が開かれているとは、この可能性に開かれているということである。同時に、そこに集う人々の自由な創造と経験を守るためにしっかりと閉じられ、安全な場所であるということでもある。

劇場とは何かかわからないからこそ、劇場はアーティストを必要とし、観客を必要とする。アーティストによって劇場の可能性は実験され、拡張され、そこに観客が集まり、反応することで、その場に一時的に集まった見知らぬ者達の仮想的な共同体が生まれる。劇場がどのような場所かは、いつまでも誰にもわからない。劇場で働く者は、誰よりもそのわからなさ、その可能性自体を自覚している。そしてアーティストだけでなく、観客もまた劇場をもつくる。だから劇場は、劇場に何が可能なのかまったく知らない観客を常に新たに必要



© Hannah Aders

那覇文化芸術劇場 なは一と

那覇市市制100周年にあたる2021年にオープン。感動を共有する文化の拠点として、文化芸術の専門スタッフと市民の対話に基づき、「地域文化を創造・発信する」、「優れた文化芸術に触れる」、「育て・交流する」ことを目指す新しい劇場。花ブロックなど、那覇らしさがたっぷりの外観や海の中をイメージした大劇場、首里城の軒先をイメージした小劇場なども魅力

はやし たつき

東京藝術大学特任講師(2014~17年)、沖縄県文化振興会チーフプログラムオフィサー(2017~19年)、ドイツ・フランクフルト市の公立劇場キュンストラウ・ハウス・ムーン・ゾントゥム企画学芸員(2019~21年)を経て現職。翻訳書にエルフリデー・イェリネク「光のない。【三部作】」(白水Uブックス)、共編著に「Die Evakuierung des Theaters」(Berlin Alexander Verlag)、翻訳にハンス=ティース・レーマン「ポストドラマ演劇はいかに政治的か?」など

戦後の那覇は、復興を背景に目まぐるしい変化を遂げてきた。昔ながらの赤瓦家や時代を反映するユニークなビル、近代的な住宅がひしめき合うすぐ隣で、墓と自然が共存する那覇を、4人のアーティストが独自の視点でリサーチ（調査）を行い、それぞれの感性で表現した。



緑ヶ丘公園にあった子どもの楽園

翁長 巳酉

その昔、那覇市は橋でつながる大小の島々からなる集落で、現在の緑ヶ丘公園のある地域は、1970年の地名改編まで「見栄橋」と呼ばれていた。公園には破風墓や亀甲墓がぎゅーっと立ち並び伝統的な墓地の丘。所々ガジュマルなど樹木も生い茂り、マンガースや蛇がうろつく怪しい場所もあったのだ。そんな丘に、戦前南米に移民した県人達によるペルー沖縄県人会（初代会長・具志堅善光）の前身の組織が、戦後の米軍統治下の沖縄の子ども達の教育施設建設費として2万ドル（約130万円）を寄付。1954年について「子供博物館・ペルー館」が完成。その近未来的で斬新な建造物に、子ども達はすっかり心酔してしまっ。アマゾンの蛇の皮や天体模

型など約500点を展示。日本各地からも民芸品が届いた。映写室も完備。週に1回テルリンこと照屋林助氏のからべ歌講座など、学問と文化にあふれた子供博物館は開館から10日で3千人を超す入場者。まさに子どもの楽園となったのだ。1957年にPTA連合会が事務局を2階に移転。以後「PTA会館」の名称で定着、那覇市の新しいランドマーク的存在となる。1966年に久茂地に少年会館がオープンし、子供博物館は閉館。1980年緑ヶ丘公園整備事業でPTA会館が立ち退きになるまで施設は存続。PTA会館は近隣の子ども達の溜まり場だった。ペルーからの寄付の経緯や博物館の詳細など興味深いお話は、またいつかのお楽しみ!

※子供博物館は当時の名称のため「子供」と表記し、それ以外は「子ども」と表記



1970年代の那覇
協力：
沖縄アーカイブ研究所
那覇市バノラマ2
久茂地～牧志編
https://okinawa-archives-labo.com/?p=8036



おなが みどり

那覇市生まれ。ブラジル在住12年、サンパウロを中心に音楽活動を開始。1999年ジャズピアニスト板橋文夫・国際交流基金ブラジルツアー（CDと書籍）に参加。世界のウチナーンチュ大会第1回目より音楽公演出場、BEGIN うたの日コンサートサポート出演5回。オリジナルレーベルDeep Brasilでブラジルの伝統芸能、サンバのハウツーDVDを制作する。2021年文化庁支援「自然との対話～祈りの島」でたこホールで、映像・音楽などを担当



まち歩きで遭遇する史跡や拝所の数々。かつての那覇に思いを馳せて、歩みを進める

津波 博美

① オレンジの誘惑 1月15日
西～通堂町～辻～久米～若狭～松山～若狭～辻～西
若狭界隈の住宅地に突如現れたオレンジの開館から10日で3千人を超す入場者。まさに子どもの楽園となったのだ。1957年にPTA連合会が事務局を2階に移転。以後「PTA会館」の名称で定着、那覇市の新しいランドマーク的存在となる。1966年に久茂地に少年会館がオープンし、子供博物館は閉館。1980年緑ヶ丘公園整備事業でPTA会館が立ち退きになるまで施設は存続。PTA会館は近隣の子ども達の溜まり場だった。ペルーからの寄付の経緯や博物館の詳細など興味深いお話は、またいつかのお楽しみ!

② 公園巡拝 2月5日
牧志～安里～牧志～安里～泊～上之屋～泊～安里～牧志
那覇市内にある公園はかつて拝所や墓だった場所が多いと聞き、公園を見つけるたびにそれらを探すようになった。この日は牧志公園にある拝所を含め計5カ所拝んだ。

③ いつもの駐車場で 1月18日
壺屋～松尾～久茂地～牧志～壺屋
壺屋で地図を広げていると「お困りですか？」と高齢の女性に声をかけられ、最近地図を頼りに歩く人を見かけなくなったと気づく。この後、那覇市歴史博物館で歴史について学ぶ。ちなみに一番気になった言葉は「ガジャンピラ」。

④ 元小祿ボウルから北北西へ 2月12日
小祿～田原～金城～山下町～小祿～鏡原町～小祿
気になっていた「ガジャンピラ」へ友人らと徒歩で向かう。諸説ある地名の由来のひとつに、古い時代に中国から蚊を持ち帰った人がそこで蚊を放ったという説があるとのこと。「デージ(とても)迷惑だね」と笑って話した。



1月上旬から3月下旬までは毎週末、那覇市内のまち歩きを行った。その中で目にとまったもの、感じたことを抜粋して書き出しておく。文冒頭の数字は地図上の数字のエリアを示している



つは ひろみ

南城市生まれ。1996年渡英。2006年ロンドン芸術大学プリントメイキング科進学。2007年同大学院修了。「wanakio 2008」に参加し、南城市で廃屋を使った作品を展示。モンゴル、タイなどで滞在制作するなど、移動や現地との関わり、生活空間を写真やインスタレーション、サイトスペシフィックで表現。2019年に帰国し、現在は保育園でアートクラスを担当。創造力を育みながら世界とつながる喜びを伝えることにも力を注ぐ

「曖昧な境界線とつながる線」
以前はフェンスもなかった公園。人が集い、目まぐるしく風景が変わる中、何度も時代のふりいかけられ、それでも残ったかたちをなぞる



川があり、井戸があり、丘のある牧志に人々が集い、残してきたもの。残したいもの

児玉 美鈴

公園は常に人が行き交い、界隈の雑多な音、エンジン音、ベンチで雑談する人の声が入り混じる。音にあふれた公園から分岐する小路に入ると閑静な住宅街が立ち並び、一気に生活のにおいに包まれる。誰に育てられているのかかわらない鉢植えや植物、即席の屋根や柵、椅子のようなものなど人工物が随所にある。人の痕跡にあふれる牧志エリアの散策は、広大な「牧志さん家」の庭を歩いているようであり、通っていい路地なのか、撮影してもいい対象なのかと、とても気を使う。境界線が曖昧で、どこから公園で、民家で、墓

地なのかわからないほど目目がなく生活の中で付度され、空間が成り立っているようであり、各地域で見られる光景なのかもしれないが、古い建物、お墓、空き地、ホテル、マンションが比隣している姿は、生き抜くことにまっしぐらに突き進み、心が置き去りのまま交錯した心情がまじり投影されているようにも見える。戦後写真資料の「牧志の丘」というワードに目にとまった。地図上に名称は残っていないが、「シュガーローフの丘を眺望できるほどの丘」を指すようである。人の集う丘と公園がつなぐ地域の記憶を辿る旅を続ける。



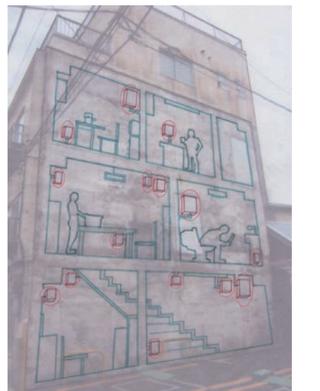
「記憶の中の地図」

緑ヶ丘公園の近所に住むGさん、先代から商店を営むAさんに出会い、昔の風景について話を聞くことができた。お墓だった頃、遊んだ記憶、変わらない道、丘の上の子供博物館とプラネタリウム、地域の方々の記憶を通して広がる風景と物語を共有しているような体験であった。記憶をもとに当時の地図を描いてもらった



こだま みさき

布や繊維素材を用いたインスタレーション、ドローイングや平面作品など、場との対話を通して作品化する。「見えないものを可視化するプロジェクト」では沖縄戦の戦没者数、風、音などを媒体に表現。個展「物語の中の風景2014」では記憶の中の風景をテーマに発表。その他展覧会「アジアファイバーアート展（マレーシア2019）」などで発表。2011年にうるま市に「Studio YAKENA 1129」を構える



その土地。その時。作者不在の借景（作品）

上原 耕生

赤瀬川原平らによって'70年代に提唱された芸術概念「トマソン」なる言葉が私に知ったのは、20代半ばを過ぎた頃だったろうか。そんなニッチなジャンルを知る由もないそれ以前から、感覚的に街のスーヅワー（路地裏）や海外のパブリックアートを散策するのが好きで、気になる外壁の前では足を止め、目的もなく記録していた。解体工事中の家屋の断面図や、老朽化した建築の醸し出すその独特の佇まいは、時に偶然通りかかる私達の目を釘付けにさせる不思議な愛嬌を持っている。戦後、県内各地で強引に推し進められた

米軍施設の建設ラッシュによって、皮肉にも沖縄全域に定着した鉄筋コンクリート建築と、吹けば飛びそうな昭和のバラック小屋もまだまだ多かった'90年代の那覇は、その両方が今よりも無秩序に混在していたように思う。沖縄の外壁は昔から強烈な直射日光や、台風、塩害の影響が大きいためか、内地の路上の風景とは少し違った、独特の空気感をまとっている。そこでは整った美術館や体のいいホワイトキューブでは決して見られない、その土地、その時代でしか出会えない、作者不在の借景（作品）に好奇心を掻き立てられることがある。



うえはら こうお

1982年那覇市生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科修了。路上や商店街、廃校舎、不法投棄地、団地など、美術館やギャラリーという「制度」から離れた現場で、壁画制作やインスタレーションなどのアートプロジェクトを展開。2011年より茨城県北にある袋田病院（精神科）にて患者とのアート活動も行う。「wanakio 2008」、2018年「TURN フェス4」東京都美術館、2019年ビューティフルディストレス（オランダ）連携 AIR事業企画運営



抜け道をどれだけ知っているかというのは、子どもの頃、学校の帰り道を楽しみさせる要素のひとつだった。大人になって歩く機会は減ったけれど、時々まちをぶらつく、くねくねと曲がった細道や抜け道、勾配のある坂なんかを見つけると、ついそういうところを選んで歩く。どこにつながっているかわからない方が心は動く。思いもよらない場所につながっていることもあれば、期待したようなところにつながらないこともあるけれど、自分の中にある何かが進んでいくのを感じる。目的なく“歩く”は面白い。

開館したばかりの「那覇文化芸術劇場 なは一と」は、真新しい建築物独特においがする。平日の午前中ということもあってか、企画展を鑑賞している人達が一組、館内に設置された椅子に座る人もいる。人の出入りは少ない。外に目をやると、小さな子がお母さんと建物の側で遊んでいるのをガ

ラス越しに見る。お散歩をしているのかな、ほほほましい。しばらくすると、その親子が館内に入って来た。小さな子が楽しそうに歩きまわり、その後ろからお母さんもついてくる。「まち全体が劇場」。クロストークの中で出てきた言葉。あの小さな子にとって、劇場は散歩コースのひとつだったのかもしれない。初めてなは一とを訪れた時のことを思い出しながら想像する。公演する場所を劇場周辺に展開したり、近くのビルで県内外・国外の表現者がレジデンスできる場所があれば面白い。劇場に関わる物販も館内で完結するだけではなく、周辺のお店や本屋などに行くで購入できるようになれば、散歩コースは広がるかもしれない。

期待したようなところにつながらないこともあれば、思いも寄らないことにつながっていくこともある。“歩く”ことで何かは動いている。

食卓テーブルで音遊び響きが廻るー

古謝 麻耶子 (サウンドアーティスト)



ブルを囲んだ。発せられた瞬間、消えていくはずの物音や声が何度もその場にループし、そのおかしさに笑ったり、「きれいだね」とはしゃいだりした。2歳の小さな子がグラスにプラスチックのキューブを延々と落として遊ぶ音も、柔らかな音となり繰り返された。

基本的に私達は他者の表現を観賞するのが好きだし、自分の思いついたことを共有できた時には喜びが生まれる。表現したり、誰かの表現に反応したり…、それを呼吸するかのように行うことのできる環境は、私達の心を柔らかくし、今ここに生きている感覚を強めてくれる。風に揺れるガジュマルの気根が、私達の音を聞いて踊っているように見えた。

開催日、多様な年齢の人々が食卓テ

「なは一と×AIO クロストーク」を終えて

又吉 美輪 SOREMOMATAYOSHI (アーティスト)

私は静かにすることもあるし、人とワイワイつくったものを見せ合ったりするのが楽しい。そんなすごく個人的な理由で忙しい人だ。

現代アート、塩田千春さんの作品を見て、とても大きなホールに佇んで、なは一とにとつてのアートってなんだろうと思った。私達が入れそうなスペースがそもそもあるのかな。そしてそのまま質問した気がする。なは一とはどこまで、自由な余白がありますか？ そんな余白ってありますか？

実際に企画制作の方の話は、私の持っていたイメージと全然違い、とても親しみやすかった。市民劇場としての課題を考えながら運営していくこと、言葉に気を使いながら丁寧に説明されていたのが印象的で、この建物が持っている、もっとオープンなスペースとして活用できることを、ぜひやってみてほ



しい、そんな回答だった。その反面、アーティストが縛られずにつくるようなすごい作品が見てみたい、そんなアートへの個人の本音も聞けた。アーティストにもいろんな人がいる。どちらの方向にも広がっていきけるんだろうなと思った。

ここで何かやるなら、カッコいい場所だしいろいろ準備が必要だと思う。でもこの場所が持つ可能性がまだまだあり、何かをやりたい時、相談をきくと聞いてくれる人がいる。

クロストークを企画してくれたAIOさんに感謝です。最後に、個人的によかったところが、参加された人が多く、みんな言いたいこともわりとある感じで、終わってもロビーでいろいろ話していたこと。それがまた昔の劇場丁寧な説明されていたのが印象的で、この建物が持っている、もっとオープンなスペースとして活用できることを、ぜひやってみてほ

クロストークには、たくさんの市民の方々にお集まりいただき、なは一とに寄せる要望などをうかがいました。皆様、ありがとうございました。

クロストークに参加したまちの人の声

なは一と周辺の個人や団体、機関と連携するということに期待。基本方針や施設側の悩みも聞いてよかった。周辺の建物を利用した宿泊、制作のスペースが確保できるようなことができないかと興味を持った。県内外からのレジデンスだけではなく、県内で活動する方達にとっても、制作のサポートが整うことはとても重要なこと。学校や教育機関、福祉に関連した機関への情報提供。特に未就学児から表現との出会い、なかなかこうした施設へ足を運べない層へのアプローチがあると嬉しい。年齢や健康状態、困窮度合に関わらず、誰もが芸術に出合えるまちになると素敵だなと感じた。まち全体が劇場なのだという考えであれば、様々なところを会場にすることを定期的に行えと、協力者も自然と増えていくのかなと思う

中部 40代

普段聞かないような海外の話や、デザイナー、アーティストの思想の話を聞けたのがよかったです。アーティストが思想の話をできる場所をもっとつくりたい

那覇市 20代

なは一とが市民に開かれていることを考えるきっかけになった。ハイカルチャーの発信の場で、市民・観客は受け手というイメージだったが、市民が何かをしたいと思った時に、なは一とが思い浮かぶ存在になればいいなと思った。アートといっても間口が広いので、自分が思うアートとの違いを感じながらもその違いも含めて、楽しめたいいなと思った

那覇市 30代

アートという言葉で議論するのは難しいです。私も大学で研究をしていたのですが、それでも今日の内容にどんな意見を持ったか、なかなか言葉にできません。言葉にするのかどうかということもありますが、なは一とが市民の近く感じられる施設であってほしいと思いました

那覇市 20代

なは一とに専門員が誕生してよかったです。期待しています

那覇市 70代

Event report 開かれた場でアートを楽しむ休日

子どもなりに社会とつながる、大人なりに公園で遊ぶ

久高 友嗣

CAMP-O協同組合(キャンプ沖縄事業協同組合)専務理事・発起人代表

“公園に行けば、誰かいる。”

小学生の私は、そう思って、近所にあった団地の公園をしばし訪れ、遊んでいた。ブランコや滑り台をしたり、小さいグラウンドで野球をしたり。はたまた家から持参したカードゲームをベンチや階段で始めたり。そこでは、隣人であり他人である、同級生以外や初めての子どもといつの間にか馴染んでいた。

青丈が伸びてその公園を訪れると、当時、広大な遊び場感じていたそこはスケールが小さく感じた。しかし、よみがえる思いは十分に詰まっていた。

思い返すと、今の、初対面の人も何かしら共通項を見いだす能力や自由に場をつくるセンスは、当時のその公園で培われたのかもしれない。

そして大人になった今でも公共空間で場づくり、遊びをしている。

新型コロナウイルスの影響で自粛が始まり出した2020年3月の平日に、泊緑地でテント空間を広げアウトアコワーキングの場を実験的に開いた。子どもの頃と違うのは管理者の専用使用許可申請という手続きに則ったこと。まち中での実施は、女子高生らやお迎え帰りの親子、近所の知人など普段はあまり縁がない方も交流を持ち、他者の存在を自然に感じ合うきっかけとなった。



2021年2月27日

緑ヶ丘公園でのクロスオーバー実施時のアーティストトークの様子。1950〜60年代にかつて子供博物館が当公園付近に立地していたことを知る。因らずも当原稿の主旨と重なる

2019年11月

うるま市の島嶼地域で開催された、うるまシマダカラ芸術祭にて、会場のはな中学校校庭で「ソルおぼとゆんたくキャンプ」という名の地元で実在した方の人形と、ともに、来場者や作家が交流できるスペース・フォスポットを設けた



くだか とつぐ

1990年、那覇市首里生まれ。琉球大学工学部環境建設工学科建築コース都市計画研究室卒業。2020年10月、県認可のもとCAMP-O協同組合を設立。現在16の事業者が集う、アウトドアやレジャーの枠を超えたキャンプの可能性に魅了され、キャンプや屋外関連の企画運営のサポートや遊休地の利活用、事務局などを担う。クロスオーバーの場づくりを担当

ともに歩み、ともに創造する場所を目指して

平良 電次

NPO法人シネマラボ突貫小僧 代表

2/19(土) 開催



「AIO×なは一とクロストーク」の司会を務めて

「クロストークの司会をしてほしい」

AIOから依頼を受けた時、正直言って「なぜ自分に?」という疑問からスタートした。そもそも僕はアート業界のことはまったくもって詳しくない。「だからこそ、一般的な立場で質問してほしい」とのことなので、不安ながら受けることにした。

第一部はAIOの設立経緯と運営方針についてティウス・スプリーさんと内間直子さんから話を聞く。特に2000年代における前島アートセンターとwanakioの歩みを知ることができたのは大きな収穫だった。その存在は当時から知っていたのだが、「同じ世代が楽しそうな活動を行っている」と羨ましく眺めているだけだった。その活動がAIOに受け継がれていることを知って納得したのと同時に、今回お手伝いさせてもらえることに喜びを感じた。

また、「なは一と」職員のお二人、林立騎さんと仲嶺絵里奈さんの話も興味深かった。それまで個人的に2016年に休館した那覇市民会館の代替施設、いわゆる貸館が主体のハコという認識だったのだが、なは一とはそうではなく、現場の職員

アートと地域をつなげるクロスオーバー

公園など開かれた場所で、まち歩きや音遊び、アーティストトークを楽しんだ

vol.1 2/27(土) 開催

vol.2 3/12(土) 開催

vol.1 緑ヶ丘公園 + Punga Ponga

パラダイス通りから旧緑ヶ丘公園を登ったあたりには、紫が美しいメイフラワーが咲き乱れ、国際通りからひと筋入っただけとは思えない静かな時間が流れていた。昔はこの丘から海が見えたという。再び公園に戻ると、アーティスト達が様々な楽器を奏でている。公園を横切る市民は、加納由美さんのクリスタルボウルや翁長日西さん(P4)の音が出るチューブのサウンドに思わず足を止めていた。夕方からは、緑ヶ丘公園をリサーチした翁長日西さんと児玉美咲さん(P5)がその成果を発表した。

vol.2 牧志公園 + RENEMIA

壺屋小学校界隈や開発で昔の面影が薄れつつある桜坂などを歩く。牧志の村ガー(共同井戸)だった東の井戸(あがりのかー)のスージグワーからは、近代的なビルの間を走るモノレールと錆びたトタン屋根の平屋が立ち並び那覇らしい景色が見えた。公園では、サウンドアーティストの古謝麻耶子さん(P6)と犬塚拓一郎さん、harikuyamakuさんが子ども達と音で触れ合った。那覇をリサーチした津波博美さん(P4)は古地図の面白さを、上原耕生さん(P5)は不思議な魅力を放つ壁を写真で発表した。

